

# 野村芳兵衛における自筆の記録・メモの意味に関する一考察 -「ノートを作る」指導論の生成過程の解明へ向けて-

A study on the meaning of Nomura Yoshihei's handwritten records and notes  
Toward elucidating the generative process of Nomura's "note-making" teaching theory

石上 佐知子

## 要旨

筆者は、大正新教育期の実践家である野村芳兵衛の「ノートを作る」指導論の生成過程を解明することを課題としている。本稿ではその研究の第一段階として、野村がノート指導に着手するにあたりその背景や土台となったもの、とりわけ野村自身の記録やメモを書く態度について明らかにした。野村における書く態度は、幼少期から成長に沿って浸透し、やがて深く根付き、生き方に関わりながら野村自身を発展させるものであった。その上で、ノート指導の理論生成の創始期における特質について考察し、教師が内発的にノート指導論の生成に着手する意味について指摘した。なお本稿を踏まえ、野村による「ノートを作る」指導論の生成過程全体に関する論考は別稿を立てて論じる予定である。

キーワード：野村芳兵衛 (Nomura Yoshihei) / ノート指導論 (“note-taking” teaching theory) /  
ノート指導 (“note-taking” teaching) / メモ (take notes)

## 1. はじめに

今日、ノート指導の意義が問われている。新学習指導要領が目指す資質・能力の育成へ向け、「主体的・対話的で深い学び」の実現や学習評価の充実に資するノート指導の在り方に加え、一人一台 ICT 端末の実現<sup>(注1)</sup>により、学びの広がりや効率化及び個別最適化等の視点から、両者の指導法に関わる議論が盛んに行われる。ただしこうしたノート指導に関わる議論はこれまでも、時代の変遷や教育改革、また書き記す学習用具の変容の度に繰り返されてきた。

そもそも日本におけるノート指導に関する研究は、明治5年「学制」により書き記す学習用具が「石板」「草紙」と規定されて以降、主に個別の実践家における実践を通して論じられてきた<sup>(注2)</sup>。その中で例えば、大正期に「機械的(略)に書込

むことばかりを主にしてはならない」(遠藤 1917)と指摘されたノート指導の中心的課題は現代まで続き、さらに急速なデジタル化により問題は複雑さを増した。こうして繰り返される議論は、授業や学習の質の向上にノート指導が深く関わることを認識させると同時に、各時代において個別に生成された理論の蓄積や、その一断面あるいは表層部分を把握するのみでは、ノート指導の本質的な目的及び課題解決は果たし得ないことを示している。すなわちノート指導研究として、通史的な視点をもちながら、ノート指導論の形成過程の特質に関する研究と、その蓄積が必要であろう。

以上を踏まえ、ノート指導論の生成過程を見る事例として有効であると考えるのが、戦前から戦後にかけて展開した大正新教育における代表的教育思想家・実践家である野村芳兵衛(1896-1984)の「ノートを作る」指導である。

野村は、大正新教育の「いわばクライマックス」(梅根 1951)と評される池袋児童の村小学校

ISHIGAMI, Sachiko

北陸学院大学 教育学部 初等中等教育学科  
国語・国語科指導法

(1924-1936、以下「児童の村」と表記)において、開校から閉鎖までを通して教育実践を続けた唯一の人物である。その児童の村実践の集大成といえる『生活学校と学習統制』(1933)において、到達した「生活の組織化、それが学習である」(p. 94)という定義に基づき、自ら構想した教育課程の中心に「ノートを作る」(p. 101)ことを据えて児童の学習(=生活)の全体を統一し、構築しようと試みた。当時、主事として大きな影響力をもっていた野村のそのノート指導は、児童の村で「ノート学習」として定型化され、開校期間における後期の学習形態を特徴づけるものとなるが、理論生成のプロセスはこれまで明らかにされていない。つまり、野村が自らの生活教育思想に基づき約13年間にわたりノート指導実践に取り組んだ過程を実証的に解明できれば、ノート指導の理論生成に関する特質を把握することが可能になるのではないか。それはこれまで看過されてきたノート指導論の形成に関する研究の蓄積に資すると同時に、歴史的なノート指導の課題を乗り越える一助となる。

そのためにもまず、野村のノート指導の理論生成における創始期において、野村がいかに内発的に課題を抱き実践へ向かったのかを明らかにする必要がある。

## 2. 本稿の目的と方法

上記の問題意識に立ち、本稿では、野村の生い立ちから「ノートを作る」指導実践を始めるまでの期間を主な調査対象とし、とりわけノートに関わりの深い、記録やメモを書くということに関する野村自身の態度や行為に着目しながら、ノート指導にどのように着目し実践へ向かったのかを明らかにする。その上で、野村のノート指導論の生成過程における創始期の特質について考察したい。

なお、先述したように「ノートを作る」指導について発表したのは1933年の著作であるが、実質的な取組は児童の村着任直後から始まる。したがって本稿の対象はそれ以前、野村の児童の村着任までとする。

手掛かりとする資料・史料は野村の言説の他、岐阜県歴史資料館(以下「岐阜史」と表記)に保管される、家族が寄贈した手書きの記録等を含む

史料5421点である(引用は、目録番号を「史〇〇」と表記)。特に本稿との関連から野村による手書きのメモや記録を中心に扱い、それらを活字となった言説等と照らし合わせながら目的に迫る。

なお、書き記す学習用具は時代や実践によって様々に呼称を変えるが、各時代の呼称はそのままの表記を用い、それらの意義や機能、指導法に関連して論じる場合はノートやノート指導を用いる。

## 3. 野村のメモや文章の記録との関わり

まず、野村の児童の村着任までの主な経歴と手書きのメモや記録との関わりについて、その概要を次頁の〈年表1〉にまとめた。

本稿の調査対象は〈年表1〉のAまでであるが、関連する資料や著作がA以降にあるため、それらを表記した。また野村の代表的著作は〈年表1〉の1～6で、「ノートを作る」指導論が生成されるのは先に述べたように〈年表1〉の4であるため、区切りとしてBを付した。またA以降は参考として扱うが、本稿における野村のメモについての考察上、⑪⑫は詳しく扱う。

以下、〈年表1〉に沿って論じていく(関連する項目は「年表中1」や「年表中①」と表記する)。

### 3-1. 師範学校入学(大正3年)まで

野村は1896(明治29)年、浄土真宗の篤信者である両親のもと岐阜県の山村にある農家の長男として生まれた。実直に農民として生きる両親から信仰を受け継ぎ、親鸞の同行思想を教育思想の根底に据えたことはよく知られる。

野村自身、「私の最初の関心ごとは、仏さまであった」(年表中6 p. 15)としており、「いちばん最初の人生の記憶」についても次のように語る。

わたしの人生の出発は、恐怖ということであった、なんともいえない不安・おびえが最初の記憶からわたしを薄暗く包んでいた。(略)すると母親は目をさましてわたしを抱いてくれる。(略)やがて母親はお仏壇の前へ行ってお燈明に火をともし、「なあ、芳、仏さまがまもってくださるでなあ。」といいながら、じっと抱きしめてくれるのであった。(岩本・岸 1970 pp. 23-24)。

野村にとっては、母親の懐に抱かれることと仏様にお参りすることすなわち信仰は一つに結ばれていた。そうした信仰の深さは少年期における書く態度に現われる。10歳の時に経典「正信仏偈」をすべてひらがなで書き記した（年表中① 史9-1-0）。また、親鸞の同行思想と自身の教育思想のつながりについて、野村はのちにこう述べる。

人間の子どもは、生まれてすぐからもうまわりを見回して、まわりの人たちのまねをしようとする。つまり同一の要求を持っている。そこで、まわりの人たちのように育っていくのである。だから、同行の呼びかけこそ、人間の子どもにとって必要なものであり、これこそが、教育なのだと私には考えられる。（年表中6 p.20 下線は引用者）

「子ども」と「まわりの人」すなわち大人（教師）を含む自分を取りまく人々を、教わる者と教

える者と区別するのでなく「同一の要求を持つ者」とし、「いっしょ」になって教え合い育ち合っていくものが教育であるという。これが野村の生活教育思想の原点である。

野村はこの後「腕白だった私が、高等科を卒業するころから、内気な人間になってしまいました」（年表中1 p.96）といい、ときに「幼少期（略）自閉症となるべき気質」（年表中6 p.15）と、またときに「十五歳から十七歳の二カ年間、ひどい神経衰弱」（年表中6 p.45）と自己を表現するようになる。そして救いを求めるように「何時も自分を見てくれるもの、そして自分を愛し自分をよくしてくれるもの、そうした心持で私は仏を信じるように」（年表中1 p.96）なるのであった。

一方、上記のように宗教的に思索深い少年とは違った一面が野村の自筆の記録には現れる。師範学校時代に書いた回顧録「我幼時」（年表中③ 史9-2 後述）によれば、「自分が幼時は、非常に快活だった。むしろ乱暴だった」ほどで、「六歳

年表1 児童の村着任までの主な経歴と手書きのメモや記録との関わり

年月	野村の略歴及び主著	野村のメモや文章の記録	関連する著作の番号
1896(M29).3	生誕		
1902(M35).4~	尋常小学校		
1906(M39).2			
1908(M41).4~	高等小学校		
1910(M43).3	高等小学校卒業、農業に従事		
1912(M45).4	尋常小学校代用教員着任		
1914(T 3).4	岐阜師範学校入学	①「正信念仏偈」をひらがなで写本 ②「月夜」を作文／学級の児童新聞の記者となる 個人文集「洞戸少年」を作成、「雪の朝」が『児童世界』に入選	
1918(T 7).4	洞戸小学校着任		
1919(T 8).9	岐阜県女子師範学校代用附属加納小学校着任		
1921(T10).12	同		
1922(T11).5	「私の信仰と修身教育」『小学校』入選論文		
同 .8			
1923(T12).5		③『作文帳』／「手帳」と「筆記帳」について ④「村の教育」	2, 4
1924(T13).4	児童の村着任		
同 .10			
1925(T14).3	1『文化中心修身新教授法』		
1926(T15).5	2『新教育における学級経営』		
1929(T18).10	『綴方生活』発刊		
1932(S 7).1	3『生活訓練と道徳教育』		
同 .2			
1933(S 8).6	4『生活学校と学習統制』		
1936(S11).1	5『新文学精神と綴方教育』		
1947(S22).7			
1954(S29).12			
1973(S48).2	6『私の歩んだ教育の道』		
		⑤『善の研究』メモ1 ⑥『善の研究』メモ2 ⑦小鳥よ翼は弱し ⑧『善の研究』メモ3 ⑨『善の研究』メモ4 ⑩『善の研究』メモ5 ⑪『善の研究』メモ6 ⑫『トルストイの精神解析』メモ	4 4 4 A 4 B 6

の頃から(略)いつも野山を駆け回って体に傷のたえまがなかった」という。また高等科になった秋に「月夜」という作文を先生に褒められ嬉しかったことや、学級新聞の記者に選ばれて「投稿者としても努力した」ことが生き生きと書き記される。

さらに、高等小学校に進級すると野村の書く態度はより積極的になる。年に2回の発行を予定する個人文集「洞戸少年」(年表中②)を作成し、例えば高等小2年(13歳)時の同誌(明治43年1月発行)には、将軍の肖像画や、地理・農業等についての研究のほか、自分の内規や作文等を掲載した。当時の校長によれば「内容の豊富なこと、毛筆でていねいに書かれた記述の緻密なこと、編集のおもしろさは十分に少年雑誌をおもわせる」(p.92)出来栄で、ここに掲載された「雪の朝」(下記)と題した文章は当時全国的に多くの読者をもっていた雑誌『児童世界』で一等入選したという<sup>(注3)</sup>。

#### 「雪の朝

昨日から降り出した雪は、今朝になっても降ってる。あたりは一面の銀世界。隣の梅野木も花が咲いたようだ。野から飛び立った雀が梅野木に止った。ぼさりと雪が落ちた。美しいなあと眺めていると、『にいちゃん、早く御飯を食べんのか』と家の中から弟が呼んだ。』

このように野村の少年期における書く態度は徐々に浸透する。しかも野村におけるそれは、自ら個性を表現し楽しむものであると同時に、他者や外界へ向けた自己の表出と一体化して形作られていた。

### 3-2. 師範学校時代(大正3年～7年)

続いて、師範学校時代の野村はどうだったか。まず信仰との関わりについて、自伝「自己をみつめて」の「二 師範時代の私」(年表中1 pp.97-100)に記されている。「師範学校時代の私は、孤独な生活者(略)明るい青年時代がありませんでした」と述べ、「私の哲学は、母の教えた宗教はそのままにのみこめなく」なった苦しさを抱えながら「私を引き付けるものは宗教と哲学だけ」だ

と言い切る。ここには孤独な姿があるのみである。

一方、自筆の『作文帳』(年表中③、前掲)には違った姿が見える。内容は師範学校入学式の日から書き留めた記録をまとめたもので、多くは200字程度で書かれた随筆や日記、手紙の下書き等である。中には借りた本を破損してしまったことに対する謝罪文や絵葉書を贈られたことへの御礼文のほか、「活動写真の利用」について論じる長文もある。そのうち、はっきりと表題が付されているものは20余り。前掲の「我幼時」はその中の一つである。ここでは、書く態度との関わりが現れる「我が学校園」「昨夜のこと」という表題が付された二つの文章を以下に引く。

まず前者について。表題に添えて「作文の形式に苦む。故に国木田氏『武蔵野』の形式を借りた」とあり、自然主義文学の先駆者とされる国木田独歩の文体を真似た様子でこう書き出す。

五、六月の頃、君が我が師範学校の則<sup>(ママ)</sup>に東西に走っている小道を通ったら幾人かの師範生に出会うだろう。

続いて、道の先にある「春草夏草が茂っている(略)岐阜県師範学校の第一学校園」で過ごす学生の様子を、次のように描写する。

せいの高い木々の間ややさしい草の側に立って鉛筆と手帳を持った、元気にふれた学生が何人となき筆を走らせて居る。(下線は引用者)

当時は製紙産業における和紙から洋紙への転換期にあたり(佐藤 1988)、書き記す学習用具としては「学習帳」「筆記帳」「手帳」等から「ノート」という呼称への移行期(石上 2019)である。また同じく筆記具としても毛筆やペンから鉛筆へ移行した時期である。野村の「鉛筆と手帳」への視点は、この時期における書き記す学習用具への主体的態度の現れといえる。

そのことは、後者における次の文章にも見える。表題「昨夜のこと」に「寒き寒き十一月二十七日の夜」を付した後でこう述べる。

左手膝に右手にペン、机上には筆記帳と歴史教科書とありて、側に漢和辞林一冊肅然と置かれたり。(下線は引用者)

自室で勉強する際には、屋外の観察で使う「鉛筆」と「手帳」でなく、歴史を学習するための「ペン」と「筆記帳」と明確な使い分けが描写される。続けて野村は、勉強中でありながら「室友」の雑談に聞き耳を立ててしまう。そうした自分を「今は耳を雑談に備えたるを告白せざるべからず」とどこか可笑しみを含ませ表現しながら、その聞こえてきた内容について次の通り書き留める。

「筆記は精確なる人を作り、談話は敏捷なる人を作る」と言うことあり

このように師範時代の自筆の記録には、「筆記」に関して、書き記す学習用具を目的に応じて使い分ける主体性と、その事実を見る客観性、さらに書く意義に関する友達の発言の重要さに気づく着眼性が現れる。また、学生らしいユーモアを通して表出される、学びに積極的な青年の姿がある。

なお野村は師範卒業後、目指す教育について、一冊のノート「村の教育」(年表中④)を作成し書き留めた。野村によれば山村教育に専念しようと理想を抱き、教育経営案を含む教育計画を書き留めた(年表中6 pp. 55-63)というが、そのノートは残されていない。

### 3-3. 附属小学校勤務時代(大正8年~12年)

師範学校卒業後、岐阜県女子師範学校代用附属加納小学校に着任した野村は、信仰に関して引き続き「死が問題になってきました。如来の存在が問題になってきました」(年表中1 p. 100)と不安の中にいる。その心持が変わってきたと、はっきり自覚するきっかけとなったのが、仏教大学(当時)で親鸞の研究に取り組みつつあった梅原真隆(1886-1966)との出会いであった。その様子を野村はこう述べる。

先生のお部屋へ通されてお茶をいただいていると、先生が入って来られました。先生はやさしく会釈して、火鉢によられました。二

十分も何とも言われませんでした。私もうつむいたまま先生が火鉢で火を挟みハサミ考え込んでいらっしゃるのを、見ていました。先生は何か、私のことについて考えて下さる気がしました。黙の中に、私の魂は先生の魂へとけて行きました。私はもうこれだけでいいと思いました。わけもなく懐かしくなりました。その時先生の話して下さいましたことは、ほんとうに纒でしたが、私は先生から、純さによって救われる宗教を、しみじみと味はせられました。(年表中1 pp. 100-101 下線は引用者)

この出会いによる野村の変化を、中内(1970)は<転回>と呼び、「野村の梅原への心酔がただならぬものであった」(p. 306)と分析する。それは「私の魂は先生の魂へとけて行」くほどの強い覚醒だったのである。実際、野村はこの出会いをきっかけに「私にも童心は甦って」きたといい、「だんだんとじっくりする私自身へかえって行く」心持ちの中で、「師範時代の自分のように自分で城を築いて籠った孤独ではなくて、私なるが故の個性の道」と、自分らしい生き方を掴み始めるのである(年表中1 pp. 100-104)。

なお、ここまでに触れてきた年表中1における自伝「自己をみつめて」(前掲)については、その下書きとして、「小鳥よ翼は弱し」(年表中⑦ 史6-(1)-1)という文章を記している。

以上に見られる、野村の記録に現われる少年期・青年期の野村自身をどう解釈すればよいだろうか。宗教的な思索の深さとは別に、野村の一面として年表中1・6の著作に現れる内向性や精神的な不安定さは自筆の記録にはほとんど見られない。むしろここには、学びへの積極性ととともに、少年期における自己の思いの表出や表現の模索を楽しむかのような書くことへの態度、また、それをさらに高めようとする関心を持つ姿がある。いうまでもなく、これらはすべて野村の一面である。肝心なのは、そうした書くこととの関わりにおける野村の原点または本質は、野村自身により自覚されていなかったのかもしれないということだ。なぜなら自覚されない自身の特性は当然、言語化はできない。つまり野村により自覚されなかった可能性

のある、書くこととの関わりにおける野村自身は、何気ない日常の事実を記した幼少期から青年期までの自筆の記録にその姿を現す。そしてそこには確かに、野村の書く態度における特性が明示されているのである。

### 3-4. 野村のメモ

では次に、書く態度とりわけメモとの関わりを見ていく。

野村は読書家として知られる。岐阜史に保管される資料として野村の蔵書は2547点ある。特徴的なのは、同じ本を繰り返し読み、余白にメモしながら読む態度である。メモの内容は例えば、本の購入日や読了日（数回読んだものはその都度）、また要約や抜粋のほか想起した言葉や文等である。史料のうち最もメモの分量が多いのは、哲学者である西田幾多郎著『善の研究』（1921 岩波書店 史2-13）と、精神分析医のニコライ・オシポフ著『トルストイの精神分析』（平塚義角訳 1954 日本教文社 史2-1214）である。本稿ではこの2点について調査結果を示す。

#### 3-4-1. 『善の研究』（史2-13）のメモについて

1911（明治44）年に発刊された『善の研究』は、哲学者・西田幾多郎（1870-1945）により著された哲学書である。「純粹経験」「實在」「善」「宗教」の4編で構成される同書は、日本で初めて日本語で体系付けられた哲学書としても知られ、内容の難解さが指摘されながらも明治期から大正期そして現代まで広く一般に読まれる。野村は、同書を附属小着任後の大正10年10月23日に購入し、合計で6回読破した（年表中⑤⑥⑧～⑪）。このうち、先の〈転回〉との関わりを見るために、周辺の時期に読んだ3回（年表中⑤⑥⑧）のメモを見ていこう。

それぞれの読了日を野村は次のようにメモする。なお、⑤⑥⑧の表記は〈年表1〉の同じ番号に対応する。また後の考察のために（ ）に筆記具の色と文字の表記方法を示す。

#### 【読了日のメモ】

- ⑤大正十年十二月十一日読了  
（p. 314 漢字 黒字）

- ⑥大正十年十二月二十八日午前四時八分読了コ  
ノ意見ガ余ノ生命ノ中ニ生キツツアルヲ感ズ  
（p. 262 漢字カナ交じり 赤字）  
⑧大正十二年五月十日 軍紀祭よりかへり西舎  
第三教室にて午後三時頃第三回読了  
（p. 262 漢字かな交じり 黒字 ※p. 314にも日  
付のみ記載）

このように読了日により、筆記具の色（赤か黒か）や、文字表記（片仮名か平仮名か）などの書きぶりに違いがある。つまり同様の特徴を本文のメモに見ることができれば、そのメモが記された時期を推定することが可能だ。特に二読目では赤字で「この意見が余の生命の中に生きつつある」と強く共鳴した様子があるため、この本文メモには野村の強い思いが現れると考えられる。

以上を踏まえ、上記⑤⑥⑧のすべての書きぶりによるメモがある頁を見ると、たとえば「第一篇 純粹経験」の「第三章 意志」（p. 40）がある。この章は西田が「純粹経験の立脚地より意志の性質を論じ、知と意の関係を明に」することを目的として論じた章である。その一部に次のような本文がある。

真理とは我々の経験的事実を統一した者である、最も有力にして統括的な表象の体系が約款的心理である。真理を知るとか之に従うとかいふのは、自己の経験を統一する謂である、小なる統一より大なる統一にすすむのである。而して我々の真正なる自己は此統一作用其者であるとすれば、真理を知るといふのは大なる自己に従うのである、大なる自己の実現である。（p. 40 傍線と波線は野村）

野村は上記のように線を引き、その上下の余白にメモを書く。メモの内容は、上記⑤⑥⑧の書きぶりに対応させると次の通りである。（ ）は引用者注。

- ⑤真理（黒字）  
⑥真正ノ自己 統一作用其者（赤字）  
⑧自由とはソウメイということだ。（黒字かな交じり）

以上から次のことが推察できる。野村は一読目に、「真理」(メモ⑤)を知るために「自己の経験を統一」することが必要と思案を始め、二読目に、「真正ノ自己」は「此統一作用其者」(メモ⑥)、つまり真理を知るとは「大なる自己に従う」ということに強く共鳴した。この共鳴が先述の〈転回〉に何らかの影響を与え、「(かえって行く)私自身」(3-3参照)を認めながら、「信仰告白」<sup>(注4)</sup>の書とされる年表中1の表出へ向かった可能性もある。さらに三読目には、真理や統一を「自由」(メモ⑧)という新たな視点から考え始めた。以上は推察の域を越えることはできない。しかし少なくとも野村にとってメモは、一度書いて終わるものではない。書いて考え、それを振り返りながらさらに考えて書く。そのように思案を深める一つの手段だったことは確かであろう。

なお、同書において「統一」に関わるメモはほかにもある。例えば「統一作用 無意識 (p. 118 黒字)」や「自己 全体ヲ統一スル 最深ナル統一力 (p. 224 赤字)」等である。野村の「ノートを作る」指導の中心的概念である生活と学習の「統一」への思案は、既にこの時に始まっていたといえるのではないかと。

一方、野村の読書法については後年、次のように指摘される。

野村さんの読書は、赤鉛筆片手に、読みながら気にいったところに線を引いて読むというやり方である。(略)「ぼくは、本を読みながら著者と語るんだよ。」と(野村さんは；引用者注)言われるが、この赤線は(略)あいづちと見ることができる。このあいづちは、つまり感性的でなくて思想的・理論的なところに向けられる。(岩本・岸 1970 p. 138 下線は引用者)

つまり野村の読書メモは著者との対話の記録であり、繰り返すことにより野村の思想や理論すなわち野村自身を発展させるものであったといえよう。

### 3-4-2. 『トルストイの精神分析』(史2-1214)のメモについて

著者は、ロシアの精神分析医であるニコライ・オシポフ(1877-1934)である。野村の蔵書はその翻訳初版本であり、原題は『Tolstois Kindheitserinnerungen (直訳すると「トルストイの幼年期の記憶」)』で、トルストイの諸作品(文学のほか、政治、哲学・宗教的な作品)に現れる幼年期について分析を試みた書である。

野村は同書を、1954(昭和29)年12月25日に購入した(年表中⑫)。ちなみに野村は児童の村着任直後の1925(大正14)年に、トルストイの実験校と児童の村が似ていることを、論考「トルストイの経験と我等の経験」(野村 1925)で論じている。すなわちこのメモはその約30年後のものだ。野村のトルストイの関心は続き、すなわちトルストイの思想や実践は野村へ影響を与え続けたのである。

さてメモを見てみよう。メモの量が最も多いのは22-23頁である。2ページ分の余白に、野村による赤字のメモが文字通りびっしりと記されている。この頁はトルストイの自伝的回想録「II 最初の記憶」(pp. 23-32)の書き出し部分にあたる。著者のニコライはここに書かれたトルストイの文章を次のように分析する。

50歳のトルストイは、その生活を最初から回想しようと努力している。思い出は充分にあるらしく思えるが、ただ、それを時間的に順序だてるのは困難なのだ。それが夢の中で経験されたことなのか、目覚めている時の経験なのかははっきりしない。(p. 31)

というのも、トルストイは三歳までの記憶に「私は縛られている」(p. 23)「私は盥の中に座っている」(p. 24)の二つよりほかに「何の印象も見出しえない」というのである。

そうした文章の冒頭は「私はヤースナヤ・ポリャーナの村で生まれ、そこで幼年時代を送った。」という記述から始まる。その周辺に書かれたメモのごく一部を抜粋すると次の通りである。

(最初の記憶) - 野村／川に落ちた／河原のね

こやなぎ／お爺さんと植木／夕方の黒い屋根／谷で蟹をとる／梅岡先生／そうじを見つける／ちまき笹とりの日／妹への愛／コンピラさん／傷のある椿／梅の木を盗んだ恐怖／下谷の墓地、赤いまんじゅしゃげを切る／梅の芽生を見つけた／母とあめ玉／大きい娘におんぶする／トカゲの交尾／乃木希典の死 ほか（順不同 下線と／は引用者）

このようにメモの多くは単語やセンテンスである。トルストイの思想や観念に共鳴し着想した言葉を、思いつくままに書き連ねたと見られる。

メモが書かれた年代は不明だが、本稿3-4-1に論じた読書とメモの態度を踏まえれば、購入後早い時期に一度は読み通し、その際に書かれたものではないか。あるいは後年、何度目かの読書の際に書かれたものかもしれない。いずれにしても、このメモは最長で約20年後、野村の自伝「私の歩んだ教育の道」（年表中6）で発露する。そのうち上記引用の下線と関連する文章二つを以下に要約し考察する。

(1) 「親と子」(年表中6 pp. 15~17) について  
【要約】 六歳の頃、ともだち三人で谷川へ遊びに行った時の話である。蟹とりに夢中になった野村は日暮れに友達とはぐれたことに気づき、暗い谷間を「ころがるように駆け降り」た。その恐怖は帰宅後もなかなか収まらず、「オテラマイリニイキタイ」とねだって母に付き添われ再び暗い山道を寺へ歩いた。

これは、上記の、谷川のさわ蟹とりの話であろう。

(2) 「罪の意識」(pp. 17-19) について  
【要約】 八歳の頃、友達四人で同級生の娘と喧嘩をし、口論で負けた腹いせに娘の家の庭から梅の木を引き抜いて捨てたときの話である。四人で相談の上のことだったが引き抜いたのが野村だったため野村のみが罪の意識に苛まれることとなる。母にも相談できず苦しんだ末、ついに「かんにんしてくろ！」と娘の父親にしがみついで謝るのだった。

これは先の梅の木を盗んだ恐怖の話である。

このように野村のメモは、著者との対話を通して着想するばかりでなく、その後野村の内に留まり、思索は深まり、発酵し、やがて言葉や態度また作品となって発露する。「洞戸少年」時代の、表出と一体化した書く態度が、野村自身の成長に沿って深化したといえよう。

## 5. ノート指導への着手

以上のような書く態度に関わる特性を背景として野村は、1922（大正11）年、論文「私の信仰と修身教育」を発表する。『初等研究雑誌 小学校』（岸田牧童主幹 同文館）へ投稿し、特集号「道徳教育の改造」（1922 33巻 第五号）で三等一席に入選を果たした。同誌では前年まで、教育の世紀社創設メンバーの一人である志垣寛が編集を務めていた。志垣はこの論文をきっかけに野村を児童の村へ誘ったのである。野村はそれまで何度か投稿してはいたものの、無名の一読者に過ぎなかった。

では、志垣が目を留め、野村の児童の村着任のきっかけとなった論文とはどのような内容だったのか。

まず野村は、修身教育について論じるその冒頭を次のように自身の信仰思想から始める。

謎の生活は十八歳から二十七歳の今日まで続いた。私は最も自然な姿で最も平凡な第三の世界を親鸞聖人の歩みの中に見出した。(略) この平凡な一道は唯一の生きる道、従って私の教育もこの信仰から生まれてくる。

このように自身の教育思想の由来を述べる。その中に、これまでの苦悩を乗り越えた事実と整理された思いがうかがえる。本稿で論じてきた野村の生い立ちを踏まえれば、これは野村自身、自己の教育思想を論じるにあたりどうしても明示しなければならぬことであつたらう。そして梅原との出会いに触れつつ苦悩からの解放を次の通り述べる。

私は長らく懐かしい方として親鸞聖人を慕っていたけれども聖人の歩み方をほんとうに知りかけたように思うのは此頃のことだ。聖人



の歩まれた姿には凡人の欺瞞と純な念願とが生きてるように感じられる。(下線は引用者)

この「念願」について、野村は「念願は生活の規範意識から出るものだ」が、「規範は厳しく裁くに反して念願は許しつつ向上させてくれる」と述べ、その「感じ」を大事にしながら「出来るだけ生活を自分も味わい子供にも味はせたい」という。続いてその実現を図る上での道徳生活について次のように述べる。

褒めるのでもない叱るのでもない子供といっしょに笑うのだ。泣くのだ。喜ぶのだ。跳ねるのだ。(p. 94 下線は引用者)

模倣的の時代には努めて美しい性格の現れるような境遇に児童をおき(略)中間の時代には子供らしい程度で生活を味はせ(略)尋六の頃からは彼等の意見を尊重して努めて自治的に生活させたい(p. 95 下線は引用者)

ここには、後に児童の村で発展する野村の教育概念や教育原理の原型が見える。野村はこの2年後から児童の村で実践に没頭することになるが、初期の「教育とは教師が教えることでなくて、一所に学ぶことだ」(野村 1926 p. 60 下線は引用者、以下同)という同行思想に基づく「協力意志」の概念は、やがて大人と子供の「お互の生活を統一して行く」(野村 1973 p. 128)という生活一元の概念へ、さらに「個性を組織化して行かんとする自治的訓練」(野村 1933 p. 97)を踏まえた「協働自治」の教育原理へと発展するのである。

こうして野村は、児童の村着任前のこの論文において信仰に関わる苦悩に一定の整理をつけながら、実践に向かう。

まず、修身教育の、教材に対する根本的方針を「経験を基として、例話を副とすること」とした上で「常に子供の生活と結びたい(略)子供の生活を中心としてその課を取り扱いたい」と生活教育を志向する様子を見せ、児童の生活経験から離れない課題を設定することの重要性を強調する。その実現を図るため、ノート指導に次のように着

手する。

子供の生活にじっくりした課では必ず受持ち児童の経験を調査して置いて教案を立てる。調査の方法は(略)問いを出してその答を一定の雑記帳に書いて出させている。尚自分の受持ち児童に就いて見たこと聞いたこと感じたこと困ったこと等を『我が子の歩む道』と命名した手帳に記して置くことにしている。(下線は引用者)

師範時代の書き記す学習用具を使い分ける態度がここに発展したのは明らかだ。子供には雑記帳を、自分では手帳をと、書き記す学習用具を自覚的に活用する。目的は、児童の生活現実と学習事実を調査し、受け止め、生活経験から離れない学びを実現することであった。そのための手だて(指導)が必要であった。そこに、ノート指導が有効と着眼する。そして授業外で雑記帳に書くというノート指導を行った。同時に、自身も学習者として児童とともにより良い学びを模索するために、児童の事実を手帳『我が子の歩む道』に記録した。このように野村のノート指導の始まりにはまず、内発的必要性とともに、野村がここまで獲得してきた書く態度に基づく覚醒があったといえよう。

なおこの2年後、児童の村に着任してから野村は、受持ちの児童一人一人の記録帳のほか、学級及び自己の記録帳を作成する。こうした記録の態度についてはこれまで、児童の村の校長である野口援太郎の指示によるものとの見方があった。そのことを野村も次のように自認する。

書くことがあまりおっくうでなくなったのは、野口援太郎先生のおかげですよ。児童の村に勤めていたころ、野口校長さんは、『プランを立てるよりも、子どものやったことをとにかく記録せよ』といわれた。それでぼくは、それを忠実に守って、子どものやったことを何年にかいたもんだ。それから、書くことに慣らされて。それほど面倒に感じなくなった。(岩本・岸 1970 p. 22 下線は引用者)

しかし本稿により、「子どものやったことを(と

にかく)記録」することも、「書くことに慣」れたのも、野口に指示されたことのみが要因でないことは十分あり得る。野村自身が成長に沿って高めてきた書く態度における特性が、児童の村以降の、記録に関わる実践の土台となったと考えられる。

以上のように野村が児童の村着任前に執筆したこの論考には、ノート指導とともに、そこに至るまでの野村の書く態度における特性や、信仰と教育思想等、以後の野村実践を形作る、それぞれの創始期の様相が明示されていたといえよう。

## 6. 結語

本稿で明らかにしたように、野村がノート指導に着手するにあたりその土台となったもの——とりわけ記録やメモを書く態度は、幼少期から成長に沿って浸透し、深く根付き、生き方に関わりながら野村自身を発展させるものであった。そこに見られる特性としては3点ある。まず野村にとって記録と表出は一体化されたものであったこと、次に読書メモは著者及び自己との対話であり繰り返し書いて思索を深化させる手段であったこと、最後に野村の自筆の記録には自覚していたか否かに関わらず著作に現れない野村自身が現れることである。これらは野村の成長に沿って高まり、野村のノート指導における覚醒を引き起こす土台となったと考えられる。

その上で、野村がノート指導に着眼した直接の要因は、自身がつかみかけた教育思想に基づき目の前の児童の生活事実を知るためであった。つまり教育の目的があり、そのために実現したい児童の姿があり、そこにノート指導に対する内発的な必要が生じたのである。

すなわち野村の事例から、ノート指導論の創始期の特質として、教師自身の書く態度に関わる特性や意識と、ノート指導に関する内発的な覚醒が大きく作用することが明示される。ただし前者について、教師に予め高い特性が備わっていなければならないということではない。つまり、教師がまず書くことに関わる自身の特性に向き合い、目指す教育の在り方を踏まえながら、それを目の前の学習者の学習事実に呼応させ、何が目的か、何が必要か、何ができるか、何を実行(実践)する

かという意識で、自覚的にノート指導に着手することが必要ということである。その上で、ノート指導の過程で教師自身が必要な特性を高めていくことも考えられる。

このようなノート指導を通して理論生成に着手する意味とは何か。もとより本稿で述べる「指導」とは教師からの、いち方向からの教授を指すのではない。授業を教師と学習者の営みとすればノート指導はその営みにおいて初めて実現するものである。同時にノート指導の理論はその蓄積の中からはしか生まれえない。すなわちノート指導論の生成に着手するということは、児童の学習事実に即し教師もまた学習者として、ノートに書くことを通した営みに取り組み続けていくことを意味する。野村が創始期において作成した『我が子の歩む道』と命名した手帳はその一歩であったといえよう。

なお、野村はこの後どのように「ノートを作る」指導論を生成するのか。今後そのプロセスを明らかにしていきたい。

## (注)

- 1 GIGAスクール構想により新学力観における個別最適化の学びや探究的な学びが目指される中、コロナ禍を経て、全国の公立小中高등학교等では一人一台のICT端末の設置がほぼ実現した(教育用コンピュータ1台当たりの児童生徒数は0.9人)。「令和3年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果(概要)(令和4年3月1日現在)」令和4年10月、文部科学省より。(2023. 11. 23最終閲覧)。また同報告によれば、普通教室の無線LAN整備率は94.8%、インターネット接続率は99.4%である。こうしたICT環境の著しい発展は「ノート」がもつ手書きの限界を超えさせ、さらに新たな学び方を実現させる可能性をもつ。
- 2 拙稿、石上(2009)で次の通り明らかにした。たとえば、古賀(1911)は「学習帳の価値」を、「1. 学習を確実にす(イ自習並に練習を確実にす、ロ予習並に復習を確実にす、ハ記憶を確実にし備忘の用をなす)、2. 努力・整理の習慣を養ふ」とし、東井(1957)は学習帳の機能を四つ(練習帳の機能、備忘的機能、整理保存の機能、探究的機能)に整理し、岡島(1935)は形象理論に立った学習帳の指導法を述べる等。

- 3 野村が卒業した洞戸小学校は、昭和39年『洞戸小学校創立九十周年記念誌 文昌九十年～わたしたちの洞戸小学校時代～』（岐阜県武儀郡洞戸小学校、校長 野村茂）を発刊。当時の職員のほか、卒業生（その中の一人が野村）が当時の思い出等を執筆している。なお、「雪の朝」の文章は野村・芥子川（1958, p. 9）からの引用である。またここでは、野村は入選当時を高等小学校1年としている。
- 4 年表1『文化中心新教授法』は野村芳兵衛著作集刊にあたって『生命信順の修身新教授法』に書名が改められた。その「解説」で磯田一雄は「教育生活を中心とした著者の信仰告白であり、どこまでも自分自身を納得させるために書かれた書」と述べる（p. 263）。
- 村芳兵衛（1973）『野村芳兵衛著作集（3）』黎明書房  
 野村芳兵衛（1933）『生活学校と学習統制』（引用は、野村芳兵衛（1974）『野村芳兵衛著作集（4）』黎明書房）  
 野村芳兵衛・芥子川律治 編（1958）『生活作文の壁』黎明書房  
 岡島繁（1935）『読書教育 板書機構と学習帳』不老閣書房  
 佐藤秀夫（1988）『ノートや鉛筆が学校を変えた』平凡社, pp. 30-192  
 東井義雄（1957）『村を育てる学力』明治図書, pp. 214-217  
 梅根悟（1951）『増補改訂版 新教育への道』誠文堂新光社（引用は、梅根悟（1977）『梅根悟教育著作選集2』明治図書）, p. 256

#### 〈引用・参考文献〉

※引用に際しては、各文献の旧字体は新字体に改めた。

- 遠藤隆吉（1917）『読書法』巢園学舎, pp. 123-125  
 岐阜県歴史資料館編（2002）『野村芳兵衛文書目録』（上）（下）岐阜県歴史資料館  
 石上佐知子（2019）「近代国語教育における「ノート指導」変遷に関する通史的考察の試み—明治初年から終戦まで（1868年～1945年）—」『学校教育学研究論集』, (40), 17-31.  
 岩本憲・岸武雄（1970）『ある教師の生活探究』黎明書房  
 古賀増吉（1911）『学習帳に関する研究』自筆, pp. 1-4  
 中内敏夫（1970）『生活綴方成立史研究』明治図書  
 中内敏夫（1973）「解説」, 野村芳兵衛（1973）『野村芳兵衛著作集（8）』黎明書房, pp. 394-414.  
 野村芳兵衛（1922）「私の信仰と修身教育」『初等研究雑誌 小学校』33（5）, 93-96.  
 野村芳兵衛（1925）『文化中心新教授法』（著作集刊にあたり「生命信順の修身新教授法」に改題。引用は、野村芳兵衛（1974）『野村芳兵衛著作集（1）』黎明書房）  
 野村芳兵衛（1925）「トルストイの経験と我等の経験」『教育の世紀』3（6）, 17-33.  
 野村芳兵衛（1926）「児童の村二ケ年（二）」『教育の世紀』4（5）, 55-61.  
 野村芳兵衛（1929）「教育改造の新指標—新教育の再認識—」『教育改造』創刊号, 13-16.  
 野村芳兵衛（1932）『生活訓練と道德教育』（引用は、野

